

私の学生時代

わが青春に悔あり

本 田 正 一

1

近頃よく夢をみる。きまつて野戦従軍が学生時代の夢である。

戦争と大学、凡そ両立しない異質なものが心の底に根を下ろしている。思えば従軍生活も六年、同志社生活も六年、わが青春十二年の夢が、いま夜ごとの眠りに訪れてくるのであろう。野戦の夢はこの稿に関係はない。予科丸帽の三年と学部角帽の三年の追憶を思い出すままに辿ってみよう。

桜咲く国、さくらら、さくららと春を告げるレヴューのテーマソングが街に流れ、彰栄館の桜が咲いて、淡紅の色と香りが校庭に

ただよう古く良き時代、昭和五年の春、三百余名のエリートの人として大学予科の校門をくぐった。

入学劈頭、予科学生監・石原淳太郎先生にようやく伸びかけた頭髪を丸刈せいと怒鳴りつけられてびくりました。自由と愛を標榜する同志社にしてえらい奴がおるわいと先生の色あせた詰襟服を見直したことである。日露戦争の生き残りという古武士的存在は、その後も同志社にちよつと場違いの観があったが、山鹿素行に私淑し、学生善導の信念に生きる先生の巧まざるユーモラスな言動と孤高の風格は、一見非合理・反生理的な石原式基本体操とともに予科の名物で、何か筆者らを魅するものがあつた。

はじめてチャペル・サーヴィスに出て堀牧師の講話を聞いたのも忘れがたい。

旧制高校の入試に落ちて、言わば傷心を抱いて同志社に身を寄せた筆者らに、愛国愛人の至情に燃えて同志社立学を志された新島先生の精神と生涯を語る牧師の言葉は、若い学徒の心をついて、同志社に学び得る誇りと幸とをよびおこした。

2

英語に弱い仏教系の中学から予科に来て、語学のベテランが教授のみか学生にも多いのにあらためて感心した。

南石、浅野、速水、柴山教授の英語、ミスター・カクス、ミス・マンチェスターの会話、おまけに地理（加藤延年教授、心理学（二宮教授、西洋史（山田教授）まで原書だったから英語だけで週十四時間あつた。THOU YOU OUR SUBJECTS……にはじまる南石教授の英訳教育勅語の暗誦と英作文の漢詩英訳には泣かされた。

新入のクラスメートで、数名すでに滔々と米人教師とデイスカッションをやる者がいるのには驚きであつた。かえりみてわが非才を悲しんだことである。

それでも強雪の功むなしからず、予科三年の時、速水教授のお口添えて立命館大学の学生の英語家庭教師を一年やつた。週二回、月七円の月謝を六円に値切られたが、いちだんと語学にお弱い年長者に、ちよつぱり優越感をもつてけっこう自分の勉学にもなった。

ドイツ語は和田洋一教授、ドイツ会話が下



帽子をかぶった人が本田氏

クター・シルレル、和田教授は、当時、京大独文科をでて早々教壇に立たれたから、若さと熱で筆者らを導かれ、こちらも懸命について行った。和田教授とドクター・シルレルの発音の相違点なぞ指摘して和田教授につめより、困らせて得意がったりした。

話は現代になるが、昭和三十八年十月、西

ドイツ射撃チームを京都に迎え、同志社勢を主力とする全京都チームと八瀬で交歓試合を行なった。この閉会挨拶を筆者に命ぜられ、三十余年前のおぼろな記憶をたよりに、前半をドイツ語後半を英語で……全文ドイツ語とするべくわが能力に限度があった……生れてはじめて一席ぶったところ、西ドイツチーム団長チンマーマン氏、後に曰く、「英語の方はよく分らなかったがドイツ語の方は理解できた。」というのでいささか気をよくしている。もつとも欧州人はお世辞がうまいから顔面通りにはとつてませんがね。白紙答案を提出しても五十点はつけて下さった菊川教授、荒木教授の源氏物語・平安朝ムードの解説、藤林教授の嫡嫡たる唐詩選訳はそれぞれ天下逸品だったし、蛇博士の牧教授の進化論は他の学生が盗聴にくるほど興深く人気があった。

予科であまり道草を喰つてると角帽がかぶれないから、この辺で学部へ進学する。

3

昭和八年滞りなく予科修了、法学部法律科に進む。特に法学を究めようなどという殊勝な志をもったわけではないが、当時、法律学

科はどういうものか不人気で、猫も杓子も経済学科へ行くという風潮に、ちよっぴりわが野党反骨の精神が抵抗しただけのことである。法律学科のクラスメーツ総員二十九名、小ぢんりまとまっついていて教授と学生が文字通り暖い家族のような雰囲気であった。

当時の法学部教授陣は、右派に古屋（経済原論）、瀬川（財政）、村井（商法）、野村（民法）、佐藤（商法）、左派に住谷（経済史）、林要（経済政策）、長谷部（経済学史）、具島（政治学）、林信雄（民法）、中立派？ に黒川（金融）、松井（社会学史）、宗藤（統計）、難波（社会学）、田畑（憲法）の教授、助教……若干記憶誤りあるかも知れず……キラ星のごとく、さらに京大から進歩保守の諸教授を講師に迎え、これが渾然融和？ して百家奏鳴、万花競艶のうちにな奇妙な平安を保っていた。

しかし同志社の平和のバランスもやがで潰えることとなる、

満州事変を契機に澎湃として起るナショナリズムとファシズムの嵐は、日本の思想界、政界、学界を大きくゆるがした。東大美濃部博士の天皇機関説、京大瀧川教授の客観主義刑法学説に対する軍部議会の圧迫干渉、さら

に京大法学部教授の連袂辞職事件等、戦機を孕んだ内外情勢は象牙の塔のみ安住の場たらしめなかった。

同志社もその例外でなく物情騒然、美濃部博士擁護、滝川教授支持の声明が決議せられるかと思えば、またこれに反対する声明書が流布されたり、左右の対立は次第に激化して混乱がつづき、やがて住谷教授以下左派の総退陣で一応学内の収拾ははかられたが、後さらに右派と残留左派・中立派の抗争が第二、第三の事件にまで持ちこされ、同志社のリベラリズムは戦火の影に没しざるが、これは筆者ら卒業後のことに属する。

4

予科二年の時、他愛のない理由でストライキがあったりしたが、まずは平穩無事な時代で、相応の勉学と山、ボート、ラクビー、スキーを楽しむ、射撃部に籍をおいて、勉学とスポーツを適当に両立させていたけれど、学部では余りにも熾烈な社会変動の濤にもまれてそんなわけには行かなかった。

この時代の誰しもが味わったであろうイデオロギーの煩悶、学生々活への懐疑、学問に

対する不信……怠け者によい口実である……から、もっぱら射撃競技、スポーツに逃避したといえるであろう。

射撃部長が歴代配属将校であった関係上、この方々には可愛がつてもらった。当時、若手革新将校グループ桜会の人たちとも交りができ、適当に利用もされ、またこちらも利用した。

配属将校といえば軍事教練実施以来、自由主義の牙城同志社に陸軍省は大物を寄こしていた。だんだん粒が小さくなって、なかにはくだらないのもいたけれど、つきあってみるとそれぞれなかなか人情味あつい人たちであった。

春秋射撃のシーズンによく講義はサボったが、外国語は出欠をとられるので、この時間は精勤した。なにぶん法律学科は人数が少いので訳読お名差しの順番が早かったけれど、テキストは専門用語さえ理解すれば、予科で叩きこまれているのでわりとやさしかった。リーディングもトラスレーティングも、時には先生より巧みだったこと自負している。

天気が良いと御所の芝生でリングを噛りながら教授を囲んで講義を聞いたり、ディスカ

ッションしたり、終ると師弟相連れ京極までハイクし、松竹座をみて、リプトンで紅茶をのんで五十銭で足りた。学ぶにも遊ぶにも教授と学生お互いの血と血が通い、心と心がふれあう思いであった。

三学期に入る。猛然として試験勉強に邁進する。篤学のクラスメーツのノートを借りてブランクをうめる。吉田法晴君（北九州市長、辻本一郎君（京都商高校長、石田芳郎君（京都中京区長）あたり、この被害者の最たるものである。今この誌上をかりて諸兄の友情に改めて感謝したい。おかげで人並みに卒業ができた。

卒業生二十九人中、席次第十一番、ただしこの順位はアルファベット順である。死んだ親父はついに十一番という優秀な成績で息子が法学士になったと信じている。思えば悔多き青春であった。

（昭和十一年大正卒・京都府監査委員事務局勤務）